

## 第六章 関係の回復をめざして

### 1 ワーク・キャンプ その序章

ワーク・キャンプというこの活動の発端は、過去の活動に対するひとつの反省から生まれた。それは第一に、戦後から昭和三十七年（一九六二年）に至るまでの好善社の療養所に対する働きかけが、療養所教会止まりであった、直接に一般療養者と触れるような活動はなかったということである。そのころ、「全国立療養所内教会堂建設計画」は完成に近づいていたし、長島聖書学舎の運営は軌道にのって、全療養所に在るプロテスタント教会の体制は整いつつあった。しかし、だからといって、二、三の教会に属する信徒を除いては、療養所社会に積極的に関わりをもとうとする姿勢は見られなかった。「患者自治会に関係すると信仰生活がおろそかになるから」という言葉はよく聞かれたのである。

第二に、広報宣伝活動を充分に行なっていなかったということである。これには二つの面がある。ひとつには、死と対決しながら信仰によってそれを克服し、歩み続けてきた療養所教会の存在を、日本のキリスト教会に伝えていかなかったこと、もうひとつは、「らい」という疾患に対する正しい知識の普及と、偏見是正のための運動に積極的に取り組んでいなかったということである。

ここで、当時の状況を記しておく必要がある。昭和三十三年（一九五八年）に理事長藤原鈞次郎が死去した後、好善社には専属で働くものはいなかったが、三十七年四月より藤原偉作（理事長就任は昭和三十三年）が専任となった。八〇代の理事長から三〇代の理事長に交替したのだが、取り組みの姿勢に変化が生じたのも当然と言えよう。そして、播磨醇（現在、日本基督教団岡山信愛教会牧師）との出会いが、ワーク・キャンプという新しい活動を展開させることになった。

播磨は、すでに、昭和三十五年（一九六〇年）以来、毎年夏に、母校関西学院大学の後輩を招いて「ワーク・キャンプ」を実施していた。関西学院大学宗教総部が一九六二年十一月に発行した「忘れられた島」より、経過報告の「第一回光明園ワーク・キャンプ、昭和三五年七月十一日～十六日」を引用する。

「ライ療養所へ行きませんか」とある学院の先生の話しかけが動機となって療養所との交りがなされたのです。想像することの出来ない療養所、周囲に誰れ一人として経験者がいない中で数人のグループで計画を立てられたのです。しいたげられた島、隔離された人々、といったイメージしか考える事が出来ない僕たちは一層に療養所を恐ろしい場所として作り上げていました。不安を抱えた中で同時に一体何をすればいいのだろうという迷いが起って来たのです。「人形芝居はどうやろうか」といった意見が多かったのですが、それならわざわざ遠い所まで行かなくてもいいじゃないか、とも思いました。その頃、ちょうど、反動的な風

潮が世論を動揺させ、大学生活もほとんど世論の動揺と同じにゆれており（中略）何か僕達の全てがここに存在するといったものを欲していました。そのような中でみんなが得た唯一の心情は汗を出して、手を汚して働こうということでした。これまで療養所を訪れた人々は多数あったし、今なお多くの誠意ある人々によりそれは続けられてはいるが、その大部分は手を汚さずに帰って行く、といった事を耳にしたことがありませんでした。「僕達は普通の救ライ族とはちがうのだ」という意志が未来の情熱を支えてくれ、僕たちは僕たちの問題で一緒に島の人々と苦しようとして自己の心へ呼びかけたのです。だが問題はこれで解決して、一つの信仰のもとに集まったものではありませんでした。二人か三人のものは行くが、それ以上はどうしても無理だというのがその時の状態でした。家族の反対も一番大きな理由の一つでした。初めはそれ程の強い意志を持っていなくても、いろいろな抵抗に出合っていくうちに、しらずに自己の中にどうしても行くのだという意志が芽生えていたのだと思います。そうして十一名のものが、さまざまな問題を抱えて集まって、第一回のワーク・キャンプが行なわれました。療養所で何か大きな仕事をしてやろうというのが全員の気持ちでしたから、張り切った気持ちで乗り込んだのは、今振り返ってみると恥かしい思いでいっぱいです。実際に仕事をはじめると思者さんたちが一緒に働かれたのには驚きました。でもそれが、色々な不安や疑問を取り除いてくれることになったのです。その中でも特に、家族教会の播磨先生がたえず、僕達に不安や恐怖を起させないように配慮して下さり、安心感を植え付けるのに努力して下さった事がやはり仕事が行った原因だと思います。あらゆる事が終えた日に僕達を感じたことは、余りにも多くのものを与えられたということです。そして、来年も必ず皆んなで来るのだといった確信のようなものが、こみ上げてきました。（辻井正 記）

この関わり方は過去に行なわれてきた外部からの慰問や見学と異なり、体全体で取り組もうとする斬新なもの

であった。そこで播磨から、全国の学生を長島愛生園に集めて実施しては、と提案されると、直ちに昭和三十八年度（一九六三年）の事業計画に組み入れ、『全国学生ワーク・キャンプ』と銘打って実施されることになった（口絵⑬）。

リーダーとして経験豊かな播磨を招き、補佐役には関西学院大学 S C A (Student Christian Association・宗教総部) ワーク・キャンプ・リーダーを務めたことのある辻井正好善社社員をすえ、責任者は藤原偉作という陣容でキャンパー募集を開始した。当時、藤原は好善社の仕事に専任してまる一年目で、療養所をめぐって各地を旅行していたが、その途中で学生に呼びかけ、希望者を募り、九州から東北にかけての学生一六名と初回にのぞんだのである。

初回は、食費を好善社が全額負担し、キャンパーは交通費のごく一部を負担するにとどまったのであるから、昭和五十一年度（一九七六年）のように、現地集合で、参加費一万円を払うのとは、まったく事情が異なっていた。初めてのときには、どういうことになるのか見当がつかなかった。しかし、結果は評価し得る内容であった。それは、療養者も、キャンパーも人間という同じ基盤に立っていることを認めあい、そこから相互のかかわりが出発しているからである。この関係が、過去の「訪問者から療養者へ」、「与えるものと受けるもの」という一方的なものを打ち破ったことは間違いなく、この事実是好善社の新しい活動展開の素地となったのである。次に療養者、ならびにキャンパーの感想文を掲げてみよう。

〈その一〉 「ライ園のキリスト者」第五号（昭和三十八年一月七日発行）

過去四十年の療養生活にこんな愉快な経験をしたことはなかったと、ある病友が語ったほど、ワーク・キャンプは私たちにとって大事件であった。

実際、真夏の暑い盛り、学生さんたちはかなり激しい重労働に耐え、けん命に働いてくれた。それは単なる慰問ではなく、わたしたちとともに汗を流し土にまみれながらその交わりをおしてライを理解し生活の実態を知り、なにか精神的なものを得て帰りたいというのがその目的であったようだ。

ワークのあい間に、しきりと話しあった、ある学生さんが「ここに来た目的の一つは、真実に生きる信仰にふれるためだ」と語っておられたが、その謙虚な態度に頭がさがった。

ワークのことを思うと少々不自由なものも、じっとしてはいられないらしく日増しに参加者がふえて、あるときは六十名を越える大部隊となった。不自由舎センター周囲の芝植、職員地帯の海岸に打ちあげられた漂流物の焼却、花壇作り、草刈り……ワークのあとには懇談会や、高校生とのソフトボール交歓試合、あるいは魚釣り、そして日曜礼拝など、すべて社会とライ園とのまじわりのためのスケジュールがぎっしりとつまっていたが、またたくまに一週間が過ぎ去り、二十八日の送別会を迎えた。

最後に学生さんたちが主にあつて一つになることができて嬉しいと感想をのべておられたが、それは同時に私たちの感想であり、ワークをおして与えられた魂のふれあいであったように思う。

「またどうぞきてください」それは人間的な愛着の情とともにさらに学生さんたちが学業に励まれ卒業後社会人として、福音の証人として活躍してくれるようにと期待と祈りがこめられていたのであった。学生さんたちからワークにかぶっていた帽子にサインを求められたが、私たちの心のうちにもいつまでも感謝の想いは消えないことだろう。

(原田政人)

〈その二〉「ある群像」第一号より（昭和四十九年三月十日発行）

この貴重な体験をさせてくれたのは岡山県邑久郡邑久町虫明というところにある国立療養所長島愛生園とよばれるひとつの島であった。あたり一面はきれいな瀬戸内海の波にあらわれている島々ではあるが、そこには僕らの町や村とはなんら変りないさまざまの建物や施設が立ちならんでいた。それに国立療養所十一カ所の中でただひとつの高校もそこにあった。

ワークをおして曙教会の人たちと交わるうちに人間の深いところにある力強い信仰にふれることができた。どれほど沢山の立派な人格と出会ったことだろうか、僕はキリストの故に雄々しく生きぬく人々と交わりができたことをひそかに誇りとし、そして僕の心の奥深くに故郷が持てた喜びをしっかりとかみしめている。なんと表現したらよいのだろう。真実なものにふれたとき、涙せずにはおくまいとの言葉はそのまま僕のものとなり、小さな心のどこかで魂がゆり動かされるのを感じます。

あの礼拝で感じたこと、それは想い出というようなものではなく現実にも僕にせまってくるということ、あそこに僕の心の故郷を見出し、そこから新しく出発させられたからだと思う。

教会に行ったときのこと、ちょうど四十がらみの女の方が、

「私は東北の出身なのですが——」

と聞いてこちらに来ようとしていました。両眼失明のその方は、

「実は頼みがあるのです——」

とおっしゃるのです。

「さきほど申したとおり乳幼児の時にライにおかされたらしいのですが、そのころ、自分と兄妹のようにしていた男の赤ちゃんがいました。これまで、私一人だけがライにおかされたものと思っていたら、ある機会

にその男の方もライで失明していることを知りました。そしてその方が東北新生園にいます。で、その方にひとつだけ伝えてくださいませんか——」

やさしく語りかけるこの方の言葉のうちに、なんとも言えぬいたましさを感じた。ライという病気以上のものでもなく、もちろん病気以下のものでもないはずなのに、この病気のうちには悲しいことがあまりにも沢山つづり出されている。

「——教会に行くように、そう伝えてください。」

苦難のうちにあって常にキリストに従って歩んできたかたの言葉——それははっきりと主を証しつつ信仰をもってすすめる短い伝言であった。

一見してなにもできないような人々ではあるが、病魔におかされ人の誤解と偏見にふみつけられながらも、それをむしろ喜んでうけてあくまで福音に生きようとする人々。この言葉はいまも僕の心の奥深くひびき続  
けている。  
(朝倉秀之)

実施に当たっては、いうまでもなく長島愛生園当局、ならびに患者自治会の了解を得て始められたのであるが、この記録から察せられるとおり、交わりの主な対象となったのは、プロテスタント療養者、つまり曙教会の信徒たちで、教会を橋頭堡として長島愛生園という地域社会へ出かけてゆく方式をとったのである。この展開の仕方、好善社自身という立場を考えれば動きやすい展開となった。しかし、一般の療養者には、ウィーク・キャンプは「教会のお客さん」という印象を与え、曙教会の誘導と自治会幹部の助言にもかかわらず、療養者全体へ入りこむところまでには至らず、五度の夏をもって長島愛生園の部は一応打ち切ったのである。終止符を打った理由はいくつか列挙することができるが、ここで好善社に与えられた課題は、「どうしたらキリスト者でない一般の

療養者と交わることができるか」ということであった。翌夏から、つまり、昭和三十九年（一九六四年）からは、キャンプは他の国立療養所へと波及してゆくわけだが、いずこでも「好善社はキリストさん」「つかまったら伝道されるんじゃないか」、「教会の人に任せておけばよい」、「関係ない」等々の言葉が聞かれた。これは決してらい療養所社会の問題ではなく、キリスト者が福音を語る前に、「いかに在るべきか」を問われる今日的な課題であると考える。

## 2 呼びかけ

過去一四年間に出されたキャンプ―募集のための趣意書を読んでみると、回を重ねるに従って目的が明確化され、内容が整理されてきていることが分かる。次にその概要をあげてみる。

### 昭和三十八年度（二年目）

人の生涯に於て貴重な経験というものは幾度もあるものではないだろう。たとえ、あったとしても貴い経験が貧しくされていく現実があるように思う。ぼくたちがワーク・キャンプをするという現実が、何を意味しているのだろうか。各大学の学生が一つの療養所に集って、忘れられた社会に目をむけていくということ、は、より高められた場所への歩みではないだろうか。ライは、ぼくたちに関係のない世界ではなくて、内面性に結びつく精神的な世界を意味する。

### 昭和三十九年度（二年目）

忘れられたライ療養所の社会で、キリスト教会は証しの道を歩んでいる。奉仕に行くなどというのはよさう。汗と土にまみれて一週間の労働をとおし、ライへの認識を新たにしながら、ライ園のキリスト者に交わりを求めて参加しよう。

昭和四十年(三年目)

これまで、さまざまなイメージを多くの学生たちが持ち帰りました。O君のようにぼっかりと穴のあいたような暗い青春を送った人にとって、ライ園は人間的な感動で埋まっています。彼はいま、人生の再出発に立とうとしています。一週間の汗と土にまみれた交わりが、彼のまだ傷ついていない心の奥に語りかけたものがあつたようです。

昭和四十一年(四年目)

毎回、参加された人たちは「死と対決して生きてこられた人々から得たものは実に大きかった。」と言い、また、患者さんたちは、「学生さんをお迎えして信仰も若返った。」と語っています。忘れられた社会で信仰ひとすじに生きてきた人々に学ぶために、この機会に参加されることをおすすめします。

昭和四十二年(五年目)

ライに対する認識の実状を述べ、今日、日本のライ事業の歴史を考える必要を指摘してライを病む人はどんな苦悩を背負って生きてきたか、日本のライ事業はどのようにして起ったか、ライ園のキリスト者はいかに死と対決しながら信仰によって生かされ証しをしてきたか、その事実を日本のキリスト教会が知っているだろうか、われわれが彼等から学ばなければならないものがあるのではなからうか、一般の入所者は今なにを望んでいるのだろうか。

炎暑の中で倒れるまでのきびしい労働を自己に課してみる。しかし、そんなことぐらいで彼等の歩んだ道がわかるはずはありませんが、一週間彼等と共通の生活の場におかれることによって、なんとか対話の糸口をみつけて真実な交わりを始めようというのが目的です。（この年度より主題を掲げることにしたので、付記する）

主題 『愛神愛隣を實踐に求めて』

昭和四十三年度（六年目）

（前年度に同じ）

昭和四十四年度（七年目）

〈渡辺信夫著『ライ園留学記』（一九六八年十月、教文館発行）から引用して〉いまわたくしたちの住む時代では、苦難というものの意義が、あまりにも無視されているのではないか、ということをごいっしょに考えてみたいのであります。

戦争中の反動であったでしょうか。苦難を忍ぶということはまったく愚かだ、という考えが国民の各層にしみわたっております。苦難というものは避けて通らなければならないものである、その価値を評価してはならない、という考えが強いのであります。そういう考えを批判しておりますわたくし自身も、太平ムードの世に馴れて、苦難の意義を見忘れがちなのであります。その風潮に馴れきったわたくしが、ときどきライ療養所の門をくぐりますと、自分は眠りすぎていたのだということに気づかされるのであります。ライという病氣そのものは、克服されても、無残にそこなわれた肉体は、後遺症という形で残っております。——しかもわたくしたちが、なおそこで見ることができませんのは、この苦難を受けとめて、それに立ち向って、

人間の精神が、おのれ自身を鍛え抜いている実例であります。

この人たちの受けた苦しみを感傷的に美化しようとは思いません。少なくとも局外者であるわたくしには、その資格がないのであります。しかし、その苦難が、どのようにして乗りこえられたかを学ぶことは、しなければなりません。

主題 『苦難を学ぶ』

昭和四十五年度（八年目）

（過去十六回実施してきたキャンプの成果を検討し、継続して実施することの可否を問うため、社員キャンプとした）

昭和四十六年度（九年目）

日本には青森から沖縄にかけて、らい療養所が十六カ所もあり、一万名の患者が収容されています。といっても、これらの人たちの七〇％は、実は治っているのですが、肉体の変形が著しいこと、超長期療養のために社会的適応性をそう失していること、家族との関係が薄くなっていること、社会の偏見が強く残っていること、などの理由により療養所での生活を余儀なくされ、一種の特殊社会を形成しています。しかし、この社会は、いつまでも在るとは考えられません。というのは最近では新発生の患者は激減し、患者の老化が顕著になってきたからです。人に捨てられ、病苦になやみ、あるときは自殺を試みた人たちの住む社会へ出かけていって、その人たちと共に汗を流して働き語りあい、人間が生きるとはなにかを考えてみませんか。

主題 『生きるとはなにか』

昭和四十七年度（十年目）

(前年度にほぼ同じ内容で、はじめに詩篇一一九篇の七一節を掲げている)

主題 『苦しみとはなにか』

昭和四十八年度(十一年目)

らいを正しく理解する日として六月二五日があります。正しく理解するということは、らいは治る、遺伝しない、ということを知ることからはじまると思いますが、さらに深めてその病いにおかされた人たちが、かつて、どのような苦しみを肉体的に精神的に負いながら生きてきたかを知り、こんにち、私たちが、どのようにそれらの人たちと関わったらいいかを考えることだと思えます。

主題 『希望と絶望』

昭和四十九年度(十二年目)

わたしたちの住む社会と療養所を区別して「社会」と「らい園」という言葉があります。用いたくない言葉ですが、外と内では「違うもの」があります。なにしろ六〇年以上もそれらの人々を閉じこめてきたのですから、当然のことかもしれません。しかし、それは他人事ではなく、わたしたちに問われていることだとおもいます。目に見える垣はこわされ、取り去られてきましたが、心の垣はやはりそこにあるわけで、それをいつまでも等閑視しているわけにはいきません。

主題 『人間は互いに理解しあえるか』

昭和五十年(十三年目)

(主題 前年度に同じ)

昭和五十一年(十四年目)

〈前文略〉ところで、ワーク・キャンプと言えば、普通には奉仕活動と考えられがちですが、当社の主催するこの活動は、参加者の労働奉仕を受けることが目的ではありません。もちろん、労働はこのプログラムの中で大きな部分を占めますが、それは自らに厳しさを課すものとして、また、らいを病む人々と自然な交わりにはいるための手がかりとして位置づけられているのであって、全体としては、聖書を基盤とした、規則正しくきびしい生活の中で、心身を修練しながら、らい問題——つまり、人間関係を考える研修会です。

〈後文略〉

以上は、各年度の募集状に記された趣意の概要であるが、初回の手探りの状況から、体験的に学びとった関わり  
の集成として、この活動を表現するに至った。これは言うまでもなく、好善社とらい療養所の関わりだけから  
創り出されたものではなく、参加者全員の真剣な関わりから学びとったものの集成でもある。

昭和四十一年（一九六六年）の長島愛生園の部を実施したときのことであった。当社に支援の手をのべてくれ  
たキリスト教主義の学校に対し、返礼の意味と、いっそうの関心が深まることを期待して、特別のキャンプを開  
いたところ、一二校から一四名の教諭と公務員一名が参加した（リーダーには責任者・藤原とチャブレン・渡辺  
信夫、ヘルパーに辻井正および長尾文雄の両社員）。つまり社会人のキャンプとなったわけだが、ここで顕著に  
示されたことは、学生だけのそれに比較して、発言は地について無駄がなく、理解度の速いことであった。こ  
の経験は貴重なもので、以来学生と社会人により編成することにして、名称も『全国学生社会人キリスト者ワー  
ク・キャンプ』と改めた。これを境として参加者の平均年齢は、昭和五十一年度までの統計で二〇・七歳から二  
四・三歳に高まり、また、学生対社会人の比は八・二対六・二、男女比は一〇・六対六・八で編成されている。

### 3 プログラム

初めてのキャンプでは六泊七日であったが、過去三五回（昭和四十九年から始めた除雪の部を除く）の日程は、平均五泊六日で（最長七泊八日、最短四泊五日）、近年は五泊六日で実施するようになった。

プログラム作成にあたっては、事前、事後に療養所当局、ならびに患者自治会、キリスト教会の意向、希望、反省を聴取し、特にキャンプ実施後に参加者を再び呼び集めて会合（リユニオンと言っている）をもち、更に、リーダーの意見交換を行ってきた。経験を重ねることによって、趣意書が整理されてきたように、これを反映してプログラムも徐々に変化してきた。

一日のプログラムは特に療養者の生活のサイクルにあわせてつくられた。配慮された時間帯は、朝、昼、夕の食事時間と、午前中の診察時間である。

標準的な一日は次のとおり。

六時〇〇分 起床、掃除、洗面

六時三〇分 聖書講義（キャンパー宿舎にて）

七時二〇分 朝食

八時三〇分～一時〇〇分 労働

一時三〇分 昼食

一二時二〇分～一三時四〇分 療養者訪問

一四時〇〇分～一六時〇〇分 労働ないしは療養者、職員との交流

一六時一〇分 入浴

一七時三〇分 夕食

一八時三〇分～二〇時 療養者、または職員との交流

二〇時三〇分～二二時〇〇分 宿舎にもどって、キャンパーが一日の体験をもとに懇談し、反省する時間

二二時〇〇分～二三時〇〇分 主題の追求と晩禱

二三時二〇分 就寝

この標準プログラムに入る前の第一日目と最終日は少々異なっている。

第一日は、早朝に最寄りの国鉄駅に集合し、そって療養所に到着する。提供された宿舎にはいると、まず礼拝を守り、準備会に移って期間中の注意事項を伝え、参加者の役割を決め、その後で専門医師から「らい」について医学的な説明を受ける。こうして、いよいよ療養者の居住地域に足を進め、午後から標準日程に入ってゆくのが通例である。

また、最終日は日曜日となるように計画しているので、礼拝、聖餐式、ミサのいずれかを療養所教会信徒と共に守り、まとめとしてキャンパーは宿舎にもどり感想発表会を行なって療養所に別れを告げるというしだい。

朝六時、笛の合図で飛び起きることから、一日が始まる。六時三〇分、讃美歌の声が流れ、チャブレンによる聖書講義が主題にそって行なわれる。

一日のはじめに、まず聖書の御言葉を聞くことは、冷静に自分を振り返る貴重な時間です。日々与えられ

ている課題は非常に興味深いと思います。「理解への第一歩は、まず我々の方から他者に対し、心を開いていくことだ」と、今日の箇所では述べられています。もし全ての人に対し、無条件に心を開いていくことができれば、どんなに豊かな人生になることでしょう。療養者の人々との間には、いろいろな糸がからみあっています。けれども、キリストの愛に支えられて、人間同志として、まず素朴に交わっていきたいものです。

—— キャンパー日記から ——

ここでチャブレンとして外部から招聘した教師、および社内で指名した教師（○印）を教派別に紹介しておく。

〈日本基督教団牧師〉播磨醇、○樋口義也、兩宮恵、○小澤貞雄、○棟居勇、神山繁実

〈日本基督教団信徒〉野田文一郎、大島孝一

〈日本バプテスト連盟信徒〉河野信子

〈日本基督教会牧師〉渡辺信夫

〈カトリック教会司祭〉フロラン・ヴィンサン、藤原当悟

〈日本聖公会司祭〉鬼本照男、関本肇

以上のように、チャブレンには新旧教会より招いているが、参加者も超教派で、その職業も各様である。

キャンプ参加者と患者たちとの交流は、その一として自己紹介の放送から始められる。キャンパーたちは馴れない場所でのこの放送に不安を感じるらしいが、しかし、療養者はこの放送をよく聞いていて、「同郷の○○さんに訪ねて欲しい」と福祉室とおして特に指名されることもある。療養者は平均して三〇年近く園にいて、その間、見舞い客もなく、まったく故郷と無縁となった人もいるわけで、その変り様を知りたいのも当然であろう。しかし、一方には、同郷のキャンパーを避ける場合もある。「ほんとうは会って話をしたかったのだが、顔を見

られるのが恐しくて——」と語っていた人もいる。

交流の二として労働がある。初めのころは、療養者たちも多く労働に参加した。「共にする」という実感があつた。「無我夢中で労働に打ちこみ、へたへたと座りこんでしまいたくなるとき、ふと気がつくと、隣りに、らら者」ではなく、同じ人間が働いている姿を見出してくれたら」ということであつた。しかし、年々老化が進み、平均年齢五八歳となつた今日、共に働く人はごく稀れで、キャンパーの一人相撲にもなりかねない。療養者からは「労働を減らして、もっと訪問時間を多くしてもらいたい」との希望や、また、キャンパーからも批判を聞くことがある。しかし、このキャンプでの労働には、特別な意義がある。健康者が労働をいくら自己に蔽しく課したとしても、らしい苦悩を理解することはできない。しかし、健康者が労働に徹すれば徹するほど、肉体の弱さと精神のもろさを実感として受けとめることができる。そこでは言葉だけの先行は許されず、行動をとるなりことが要求され、おのずと謙遜な心が生まれてくる。そこに苦難を乗り越えてきた人を訪ねる姿勢が備えられてくると考へる。療養者は、その苦難と現在の「生」をどのように評価しているか、肉体の苦難をどのように乗り越えてきたかの一端を知ることができる。

療養所社会には今もなお「壮健さん」という言葉が生きている。それには、らしい療養者の「自嘲と自虐と諦観の錯綜した複雑な思いが秘められている」（森幹郎著『日本ライ社会小史』）。他方、健康者が自らの弱さを知り謙虚さがなかつたなら、患者の肉体的変形に目を奪われて、内にある人格を見いだすこともなく、慰問者としての立場を崩すことができないだろう。

ここで労働の内容について触れておこう。海岸の清掃、花壇作り、草刈り、芝植え、道路整備舗装、公園作り、池の基礎作り、測溝掘り、土地造成、防潮林の植え込み、盲人のための散歩道作り、ブロック積み、整地、池の

清掃などで、一日の平均労働時間は四時間三〇分である。

交流の三は、訪問(口絵<sup>44</sup>)ということになる。第一九回(昭和四十六年度松丘保養園の部)から、療養者を訪問する仕方を変えた。それまでは、訪問先をあらかじめ示してキャンパーを送り出したが、これを改め、単に療養者居住区を示して、自主的に、つまり全く未知の人を訪ねてゆくという仕方をとった。あらかじめ紹介するとなると、敵しさがうすれるうえに、「社会の人」と積極的に交わろうという意欲のある人に限られて、療養者全体に関わることができないと考えたからである。受け入れ側の責任者との間には一応の了解はできているものの、キャンパーは闖入者であり、礼を失することもしばしばである。療養者は、青森の松丘保養園ならば七万坪、熊本の菊池恵楓園ならば二〇万坪という広大な地域に居住しているのだから、どこでどういう出会いが起こるか分からない。昼食後の一時間ばかりであるが、話しかけて三度も断られたというキャンパーもいる。それでもなんとか交わりに入ることができている。そこで、それらの人々の感想をきいてみることにする。

「ある群像」別冊第三号より(昭和五十一年十一月発行)

涼しい夏の夕暮れ、松丘保養園のSさんを訪ねていた。窓からは小さいけれどもよく手入れの行き届いた畑が見える。ぶどう棚が夕陽をさえぎり、まだ青い実が大きな葉の下に幾つか見え隠れしていた。突然に訪ねた私を快く迎えてくれたSさんの口からこんな言葉がもれたのだった。

「小さな村に生れた私が、主イエスに出会うことが出来たのも、この病気になったからです。若い時はそれこそ口では言いあらわせない程苦しみ悩みました。しかし、今は、すべて恵みと思っています。」

一瞬会話のとぎれた空間の重さにたえかねて見た窓に陽が落ちかかっていた。「恵み」ということばをかみしめていた。私は言葉を失ってしまった。

ライという病気に對して無知なる故に隠しきれぬ不安をもって松丘に行った私が、肉の変形をなしている人を前にして感じたのは、おそろしさでもなければ嫌悪感でもなく、一人の人間の存在の重たさということだった。

患者の人たちは昔からの知り合いのように心から歓迎してくれた。療養所の生活や予防法の問題、故郷の話をし、自作の短歌を見せてもらいながら、私は驚く程こだわりなく話している自分に気づいた。いろいろとお菓子を出してくれる相手が指が不自由な人だから私がお茶を入れ、スイカを切る。おいしいからいたたく、それは自然な事だった。それが無意識の気負いによるのだといきれないところに相手の人間が立っているのだと思う。

しかし日一日とすごす中に、私の目の前で淡々と生きている患者の人が心身に差別と偏見の歴史を背負ってきた一人一人であり、指を失い顔がくずれているという現実を生きている人であることを覚えずにはいられなくなった。私の喋る秋田弁を懐しそうに聞いてくれる人が何故同じ故郷でくらせないのであるか。彼らを阻んできた現実を支える側として私は生きてきたという事実。そして彼らの前にあってもなお砕かれきれずにいる自分。

そんな時に聞えてきたのは患者の人々が主を讚美する力強い歌声であり、ライを恵みと言い切る信仰であり、イエスキリストの十字架だった。彼らにイエスが生きる道を与えられたように、自分の現実と他者の現実をしっかりと見すえてついでこい、という十字架上のイエスの声を聞いたように思う。

正しい知識を増すことがそのまますぐに偏見をなくすことにはつながらない。が、松丘で改めて知った一人の人間の存在の重たさが様々な形で私の中にありつづけようとする偏見と闘うよう教えてくれた。ライの

歴史を見つめ自己に問いつつ歩みたい。私の見上げるこの高い秋空が、松丘の空につながっているのだから。

(斎藤玲子)

交流の四は個人ではなく、集団同志としての付きあいである。初回より二、三年自ころまでは、療養者野球チームとの親善試合が催されたが、このような交流はなくなった。ここにも老化の姿が見られる。そこで、近年は次のような文化的交流が主となっている。

- 一、患者自治会執行部、ならびに評議員との懇談会
- 二、患者自治会執行部の案内による療養所内見学と、らい事業史の学習会
- 三、職員を講師とする、らい事業史の学習会
- 四、教派別信徒との懇談会、礼拝、聖餐式、ミサ
- 五、文芸団体との懇談会
- 六、盲人会との懇談会

七、看護婦、看護助手、ケース・ワーカー等、直接に患者を世話する人たちとの懇談会

これらのプログラムのねらいは、療養所社会を多角的にとらえるところにあつて、一方的な見方に陥らぬよう配慮している。

キャンパーたちの一日の終わりとして、宿舎にもどる夜の八時半ころから、懇談会が開かれる。たいてい、五、六名ずつ三班くらいに分けられて懇談に入る。その中には次のような会話が入る。

「ネコ（一輪車）を押すのはむずかしいね。」

「僕たちより患者さんのほうがよく働いているように思う。」

「労働の後の麦茶はうまかった。」

「訪問でなんと切り出したらよいか迷っていたけど、患者さんの方から心を開いてくれたようで助かった。」

「患者さんの顔を真正面から見ると悪いような気がして。」

「どうして僕が健康で、あの人たちが、らいにかかったのかな。」

「偏見はわたしたちの中にもあるんだ。」

懇談と反省が一段落すると、チャブレンによって主題追求の指導がなされ、晩禱をもって一日をしめくくる。

#### 4 キャンプ一〇年

準備会のときに、キャンパーは参加理由を一〇〇字程度で書くことになっている。これは日記と共にファイルされて、いつでも、だれでもが読めるように机の上に置かれている。それは、キャンパーが出発点を確認し合い、期間中にどのように自己が変化してゆくかを知ることができるよう、という配慮からである。全参加者ではないが、合計一八〇名について、その動機を分類してみると、一番多いのは、自己について考えるためで、三〇名、ついで、「らい」そのもの、現状と問題点、歴史、差別と偏見、自分との関わりというようなものが、一九名、信仰の問題として、積極的に生きたいというのが、同じく一九名となっている。その他、生きる意味を求めてというのが一五名いる。

昭和五十二年度を終わったところで、参加者は三七五名、延人員（除雪キャンプを除く）にすると五八四名と

なる。藤原は全三五回に参加していることから、理事長として、いかにこの活動に責任を感じているかがうかがえるが、前記の数字は既参加者の繰り返し参加があることを示しており、その理由をさぐることは興味深いことである。その点に関して直接の回答にはならないが、キャンプ後のしめくくりの仕事として提出された感想文の傾向をみると、信仰の問題としてとらえ、励ましと糧を与えられたとするもの、らい問題そのものを自己の日常に捉え長く関わってゆきたいとするもの、療養所を広報しなければならぬ、などの趣旨が多かった。

三七五名（昭和五十二年八月まで）の参加者のうち、確実に好善社と関係をもっている人は一九七名で、好善社と関係なく療養者と交わりをもっている人は推定で五〇名程いるから、六六パーセントが交流を継続していると考えられる。

いずれにしても一週間の体験は重い。キャンパーのその後の生き方に変化をもたらす場合も多い。キャンプをきっかけに、後日職場を変えた人、関わり合いをもって進路を定めた人も少なくないが、著しい例としては、キリスト教に入信することである。どの編成にも、求道中とおもわれるキャンパーが二、三名参加してくる。好善社はこの活動で「信者作り」を意識したことはないが、三四回を重ねたところで、後日受洗したという人は四〇名を越えている。

次に療養所に初めて足を踏み入れたチャプレンの感想文を引用しておく。

明るさへの問い 関本 肇

「ライ園を訪う」と、自からに念を押し、だからこそ、あえて平常心であろうとする、変に肩を張った自分が、透明な明るさと笑いの中で、戸惑いながらつつみこまれてしまったあの夏の体験。今、一つ一つを掘り起し、ライを病む友の誰彼を身近かに感じながら、矢張りどうしてもたずねなければならぬ問いは、あの

透きとおるような明るさは、なぜだろうということである。

しかし、あの人たちは、私がつずねないうちに、こちらの心のうちを読みとったかのように話してくれる。

「私は、みにくいでしょう。」

「何も悪いことはしていないのに……。」

「死んでも家には帰れない。」

「つらくても、もう涙もでない。」

しかもこれらが、日常の対話の中で、笑いのうちにさらりと語られるのである。私はじっと耳を傾け、その言葉の中みずしりとひびく重さに聴き入ろうとするが、外からは何もうかがう事はできない。恨みも疑いもないのであろうか。人生の深い苦悩を経てきた筈であるのに、私がつ想するような苦痛の表現に出逢わないのである。「なぜであらう。」この親しさと明るさとは、なぜであらうか。

ライを病む友の経てきた不幸。二〇年、三〇年、四〇年、自からの肉の崩れ、魂の苦痛、そして、社会的な人格の喪失という、私の思いを越える三重苦を、果して人間は耐えつづけることができるのであろうか。外から見て、それを分る苦しみが見えないほど、その苦しさは沸騰し限界点を超え、やがてそれは心の底深く内面化されたにちがいない。肉の痛みでも、心の苦しきでもない人間の不幸とは人間の魂の深みに入りこみ、遂に、透明な明るさの中に昇華されるものなのであろうか。

その人の意志に反して、のしかかってくる不幸は、どう考えても人間的行為の所産ではない。無辜の人間が苦しみの中で「なぜか」と絶叫しても、誰も答えない。神は沈黙している。だから、真の不幸は言葉で表現することはできないのである。それ自身では言葉にならぬ不幸。私は、ライ園の中で、また、ライを病む

友との交りのうちに、不幸という真理に出逢いはじめたのかと思う。

苦しみは説明されてはならない。人間の解釈を超えるものである。自からの不幸を、「なぜか」と問うその問いは、通常人間がやる原因探求のそれを超えて、やがて、不幸それ自身の目的を問う本質追求の求道心になる。自からの、不幸の「なぜ」を、何十年も問いつづけるうちに遂に人間の中に、神の沈黙を了解する新しい目が開けるのである。私はライ園の中に、新しく生かされた人と逢い、心の友を発見したと思うのである。

ライを病む友たちは、もう不幸から逃れようとしなくて、不幸という神秘を、神よりの創造的な賜物として受け入れているのだと言えば、暴言であろうか。それでもあの人たちは、実に確かに生きていてではないか。

透明な笑いと明るさの中で、時に恥づかしげに自分の不幸をかくすかのような兄弟たちを見て、私もまたあの人たちと共に、神の愛のなかに置かれている事を覚えるのである。

私は、ライを病む友と共に神を讚美する。そして讚美の中に輝く不幸を、今、共感しているのである。

(日本聖公会聖光教会司祭)

一方、療養者に対しては、キャンパーに対するような方法で反応を確めた事はないから、どの程度に受けとめられているか判然としない。無関心な人、批判的な人、また、なかには、そっとしておいて欲しいと思っている人もいることは確かであるが、直接に聞き出すことができない。そこで、活字として療養所内から現われたものを挙げてみる。

〈その一〉 一九七一年 青森の国立療養所松丘保養園の部、通算第六回目を実施した後、同園の機関誌「甲

田の裾」(編集人・福島まさみ)は、同誌通巻三九〇号を「ワーク特集」として発行した。その中から一文を転載する。

ワーク・キャンプをふりかえって——職員の立場から—— 梅津有三

公民館横に、観賞魚池が立派に完成し、色あざやかな錦鯉が右に左に群れをなして泳いでいる。池のほとりに置かれているベンチに腰かけて、錦鯉の泳ぐ様子を眺めていると、今年の夏、照りつける太陽の下、好善社による学生、社会人ワーク・キャンプに参加した人たちが、汗と土にまみれながら、観賞魚池造成のための整地作業に精出している姿が思い浮んできた。

この観賞魚池だけでなく、六回にわたるワーク・キャンプの実施により、雑草に覆われていた公民館周囲は美しい芝生となり入園者の憩いの場所になっているし、荒れ果てていた旧会館跡地もきれいに整地されいまは様々な庭木が植えられ、特にここは結核病棟の窓の下にあるため、長い療養生活を送る人たちの心をなごませてくれている。

また荒地だった独身重不自由者棟の周りも整地され、いまはきれいな芝生となっている。

しかしワーク・キャンプは、労働により入園者のために何かを作る、何かを与えることを主目的としているのではなく、労働を通し、また入園者や職員との、労働をはじめ様々な場での、あるいは色々の形での交わりを通して、本病及び入園者や職員に対する理解と関心を深め、さらには入園者の精神生活に学ぼうというのが主眼であると聞いている。(中略)

ワーク・キャンプでは好善社という宗教団体により、全国の学生または社会人キリスト者が参加して実施されるといふ宗教的色彩の濃いものであり、さらに当然の事ながら、参加理由が前記のような目的をふまえ

るとともに、宗教的理由からであることが多いように思われた。(中略)

ワーク・キャンプの実施により、正直言って作業の選定と準備、進行、宿舎、食事入浴等、それらを係として受持つ職員及び入園者は、色々と繁雑な負担を負うことになる。

しかし、ワーク・キャンプ関係者は、はるばる全国各地からそれぞれの課題を胸にして、この松丘でのワーク・キャンプに参加された人たちが、一週間前後の労働、語り、祈りなどの中から、人間として、あるいは信仰上で何かをつかみ、高め、また本病や入園者に関しての理解を深める機会となってくれるようにと思ひ、できるだけ心を配り、至らぬながら努めてきたといえる。

入園者及びその家族の人たちの俸せのためには、いまなお本病について、一人でも多くの人の理解を必要としている。

ワーク・キャンプを通して得てゆくものは、その人なりに様々であろうが、本病に関していえば、その表現は違っても、本病についての、あるいは入園者についての理解の深まりを示す言葉を見聞するとき、満足感を味うのは、またワーク・キャンプに参加したすべての人が、直接的に眼に見える形でその理解を生かす機会に恵まれるとはいえないだろうが、いつかどこかで、その機会に出逢ったとき、本病について、あるいは広く社会福祉に関して、ワーク・キャンプで得たものを生かしてくれるであろうと考えているのは、決して私のみではないと思う。

(本園ケースワーカー)

△その二△ 昭和四十九年十月発行、「らい園教会新聞」第四六号より

キャンプ十年 福島 政美

瀨園における好善社のワークも今年で十一年目を数えると聞き、大いなる驚きと共に惜しみない賞賛の言

葉をおくりたい。

ワークと私との関わり合いには更に、不思議なめぐり合わせがあり今日十年の歳月を振り返って見るときに、今更のように感慨ぶかいものがあり、往時を偲んで見るのも意味なしとはしないであろう。

一九六四年七月に第一回ワークが松丘において実施されたとき、私は自治会執行部の文化部長の職にあって、ワークの実施実務を担当者知れず苦勞した記憶がある。

当時、ワーク・キャンプについての知識は皆無であって、藤原理事長からお話を伺ってもチンプンカンプンであった。

理事長の熱弁を拜聴して、ワークの輪郭は把握できたが、キャンパーの構成、目的、日程など受け賜わる程に結局はキリスト教信者の獲得が、主な目的ではないかとの疑念を大方が持ったようである。

なぜそうした疑念を抱かせたかと云えば、それなりに理由があったのである。確か昭和三十六年頃と記憶するが、新教の大家と云われる方が、松丘会館において講演し並みいる聴衆に向って、土下座して神を崇めよノと一喝したとの事である。しかし聴衆はキリスト者ばかりでなく無視する者もあって、二喝三喝され、かえって恭謙するどころか驕傲な態度に反感を持ってしまったのである。

そうした下地があるところへ大挙してキリスト者が来るといっているので、警戒心が先に立ち何をされるかわからないと思ったのも道理なのである。

謙遜な心を失なった思いがった態度でケンケンガクガクの末に受け入れる事となったのである。

そうした矢先、会館の大掃除をめぐって、ちょっとしたトラブルがあり愉快でない思いをして、又かと顔を硬ばらせる場面もあったりで、最初は心に触れ合うものを得ない儘に終了した。今にして思えば回避でき

た不祥事ではなかったかと反省されるのである。

しかし物は考えようで、あの出来事はワークへの試練であったと思う。以後回を追うごとに理解は深まり、キャンパー本人ばかりではなく家族を含めての交際にまで発展している。

毎年八月になれば園内は若いはつらつとした声が聞かれ、猛暑の中を汗みどろになって働くキャンパーたちの姿を見て感動を覚えるだろう。

好善社のワークは十年にして松丘の塩になりえたと思うがどうであろうか。(甲田の裾 編集長)

## 5 心のふれあい

〈その三〉 昭和五十一年の松丘保養園の部、通算第一一回を終えたところで、「ある群像」第三一号に掲載した、丹吉松と末永フヂイの対談「キャンパーと心のふれあい」から。

### 待つ気持

丹 入園した当時、こんな病気にかかって治らないで死んでゆくのか、だけど、病いの身ではあるけれど、なんとか人間らしく生きたいと考えたな。酒を飲んだり、バクチをする人も多かったが、それを責めるのも酷で、さりとて、そういう仲間にも入ってゆけなかった。坊さんの説教を聞きにいったり、文芸にもひかれたが、そんな中でキリストの愛にひかれて洗礼を受けたわけ。キャンパーの多くは信者だが、わたしたちのように、苦しい土壇場でキリストに出会うというのではなく、壮健者でありながら信者になったという点で、

好奇心というかどんな清らかな人たちなのだろうかと、心ひかれるおもいで接したんだ。

末永 わたしも毎年八月になると、また、キャンパーが来るんだな——そう思うと新しい風が吹いてきたような気がする。心から迎えたいという喜びでいっぱいになるが、それがわたしたちの偽わらない気持だな。

立場をかえてみて、わたしが社会の若者で、好善社の呼びかけがあったとしても応じただろうか。親たちがよこすかね。やっぱり選ばれた人たちだと思うね。

丹 そうだな、彼等もいろんな障害をのりこえて来てくれる。

末永 キャンパーには失礼かもしれないけれど、私には妹や弟のような気がするんだよな。というのは、母がわたしを宿したころ、母方の家から、らい者が出たということで、母は出されて実家にもどって、わたしを育てたんだ。それから十年後にもとのさやにおさまった。そんなわけで、妹たちとは十もちがうわけ、とても可愛いかったんだよな。それから十六のときに、病気になって、母を案じ、妹を案じてここにはいつからか、文通で妹たちとずっと結ばれてきてはいるけど、妹たちは嫁ぎ先で、長女がらい療養所にいるというとき、あからさまにしていけないからな。二番めの妹が戦時中に結核になって、あと一年もとうかというとき、リュックサックでりんごをしょって見舞ったこともある。わたしが妹をおもう気持は、母親の気持もまざっているというか。その妹が治って、野草の花と茎の汁で挿画をかくれた——そんなに姉妹愛が密接でも、一回も面会に来たことがないんだよな。だから、キャンパーが来ると妹や弟におもえるんだ。キャンパーは「うちにもどったら家族に、また結婚したら子供たちに、らい療養所の話しをし、誤った考えを直すようにしたい。」と、よく言ってくるね。

丹 キャンパーが純心だということ、キャンパーのほうもかくさずに、洗いざらい語ってくれるから、私た

ちもかくさずに語れるという点も、私たちをひきつける原因でまた楽しみでもあるよな。郷里の近くから来たキャンパーだとわかれば、稲作とか、景気は、どこそこの学校はなどと聞いてはうちにいたことを思い出しながら語ることは、楽しいもんでな。

末永 郷里の家の附近を歩くこともできないから、郷里のことを聞いたり、ナマリのある言葉を聞くのは嬉しんだよな。

丹 うちの方に、もういちど行ってみたいけど、なかなか、うちに迷惑がかかっても困るし、行けないでいるんだよな。

末永 そうだよな。キャンプも十一回になるが、最初のころは、うちに入ってお茶を飲んでくださいと言っても、ほんとうにキャンパーに気の毒なような感じがして、どうにもならなかったよな。

今日になってみれば、心からの嬉しさをそのまま出して、珍しいものがあれば食べていただきたいが、——なんていうんだろう、私たちの体験を聞きたいと真剣に望んでいるかたに会うと、飲みものとか食べものではなくて、一対一で話しあって心と心のふれあいができたときは、こういう病気になるっても美しい心の青年に会えて、真からの話しができたということは、なににもかえがたい喜びだとおもうな。そういうときは、療養所に入っている自分というのを忘れるんじゃないかい。

昭和四年に入園してからだから、もう何年になるかな。その間に、もう命はないと思うような病気も三、四回して、それをおして命の尊さがわかり、また失明しかかって、開眼手術で再び見えるようになったときは、たとえようもないもので、苦しみをとおってきて、キャンパーの美しい心にふれたとき、嬉しさでいっぱいだ。

丹 人生は、外部の人もおれたちも同じでしょうが、九つの苦しみがあっても、一つの喜びのために生きようとするのが常であって、そのひとつの喜びが、九つの苦しみを補って余りあるような喜びを味わうことができるんだよな。

交わりの中から

末永 このあいだ、ハンセン氏病とよぶか、らいと言うかどっちがいいか、キャンパーたちと話があったが、らい者の家族としては、一人の姉がらい療養所にいるということが語れないということは、周囲がまだ理解を深めていない状況だから。

丹 おれたち自身は、らいと言ってもハ氏と言っても抵抗はない。けど、家族に言わせれば、ハ氏病と言って欲しいだろう。

末永 つらい過去を振り切るといふ気持で、その方がわかりにくいから、けれども、ハンセン氏病と名前を変えてさっぱりと流してしまうことができないものが、わたしたちにはあるんじゃないか。とても恵まれた時代になったけど、もとの苦しい状態がわかっているからこそ。

丹 らいもハ氏もこだわらなくてもよいではないか、という主張もあったが、それも一理あるな。いまの青年は、昔のらいの悲惨さを知らない。今のらいしか知らない。こだわっていないからさ。

いつだったか、「社会にいて苦しいときがあるでしょう。そんなときに想い起してください。」とお別れの席で言ったことがあるが、病者をおもって苦しみを乗り越えてほしいという意味だが、わたしたちが、人の捨石になれるくらいだったら、生きていける価値があると思うな。

末永 このあいだ多磨全生園に行ったとき、妹たちに来てもらって面会したが、一人は医者になり、一人は

洋裁の教師になって、それぞれ立派にやっているが、目の前に座っているのを見て、「われ捨石となりて悔いなし……」と短歌を作ったが、……大きい方の妹が、「姉ちゃんのことを、主人に打ち明けるべきなんだが、申しわけない。」と言っていたが、四十年もたってしまつて……わかつた場合は、青森に身体障害者の姉がいると言えはいんじやないの、いまさら、らい者の姉と言う必要もないと言つただけだ。

丹 病者が一人出ると、家庭はめちゃくちゃになっちゃうからな。

末永 以前に、全患協ニュースで、らいを結核なみにしてください、と言つたことがあるが、かりに早期発見、早期治療で全治して、社会に出て相当な職についたとしても、らいを患つたことがあつたとあからさまにはいえないとおもう。

丹 一回帰郷したことがあるが、汽車の中で、地主のおばあさんとぼったり会つて、秋田までいっしょに行つたけど、「病者になつたからといって、卑屈になることはない。堂々と行きなさい。」と言われた。そういうことは、本当にありがたかつた。

それから、おれが両足義足で毎夏キャンプの中で労働にも参加しているが、藤原先生から「それを支えているものはなにか。」ときかれたが、こんな小さい社会にわれわれの教会があつて、そこに奉仕的な働きが行なわれれば、出てゆかざるを得ないな。一家として考えれば、手伝いに来てもらつたら、自分のできる範囲で働くのは当然でしような。それと労働は生まれつき好きで、汗を流した快感、着替えたときの気持ちもなんとも言えないな。キャンパーとの語らひは必要ではあるけど、働いている態度、姿において、口で表現しないで、その人の心持ちがわかるときがあるんだな。

末永 それから、好善社のキャンプは、超教派で、さまざまな新・旧教派の人がいるから、お話を聞いて

反省させられる面もあるし、勇気づけられる面もあるね。ひとつの教会ではできない交わりができるような。二千年も昔は、なにもいろんな教派があったわけではないから、主にある家族同志の交わりが、ワーク・キャンプによってできるのは、大変に嬉しいことだな。

丹 教派を超えて、文通しあえるということは、互いの教派発展のためのきずなともなるな。それから、いっしょに働らいても遊びにいらっしゃい、とあまり誘わないんだ。あんまり大勢とつき合いても、みんな半端では失礼にもなるし。

末永 つきつめた真剣な話しになれば、やっぱり一対一で、心の求めが違っているとどうしても話しにくくなるな。

丹 やはり、信仰の話をするなら、一対一だな。キャンプと晩禱をささげてから話したが、そのときはたいしてよかった。

末永 求道中のキャンパーが来て話したけど、なんか洗礼を受けるための基礎になるものをつかんでいってくれればと、心で願っていた。  
(おわり)

〈その四〉 熊本の国立療養所菊池恵楓園では昭和四十九年（一九七四年）から始め、三回を重ねたが、次は「ある群像」第三一号に載せた療養者の感想である。

かかわり 鷹志 順

三回のワーク・キャンプによって五十人余りの若いキャンパーが、恵楓園の沈静した風景のなかに、青い嵐”を持ちこんでくれて、一般社会からのさまざまなかたうでの偏見と差別による苦しみの歴史のなかで生き続けてきた私達に、大きな影響を与えている。

それはある人にとっては、夏の日、肌を慰やして、くれる（社会的には偏見、肉体的には発汗機能を失なった苦しみ）涼風のごとく吹き去った想い出であったかもしれないし、受けとめ方によっては、過去の人生観をさえ変革させるほどに激しい台風の渦巻であったかもしれない。

幼い頃に発病して療養所にはいった私は、社会人（療養者の立場でみての）とのかかわり、交わりなどないままに成長してき、それは、両親と兄を除いた弟妹達にさえ、私の存していることを秘められていたほどだったので、文通にしてもだえて二十年を教えていたのだった。だから、私の体験によってつちかわれた知識と言えるものは、狭い、限られた療養所の中のできごとの積み重ねが根幹であって、その他は書類、マスコミから提供された情報の受け売りにすぎなかったのではないか。

偏見差別を社会から根絶して欲しいと叫んでいた私は、療養所に身を温存し、街頭に立つこともできなかったのであり、肉親をさえ啓蒙することができない、という空しさが常につきまとっていた。

キャンパー達との三年余りの文通、訪問などのかかわりの中で、私が最も大きく自覚させられたことは、私が「生きている事実を自から認めることができたという、人間としての初歩認識が得られたことである」。

昨年と今年、兄の家を訪れ、弟達や姪甥達に囲まれて食事を取り、一緒に散歩を楽しむ機会を与えられたとき、生きてきたことの価値を真に理解することができた。肉親とのかかわりを取り戻したい、兄弟に会って話したい、という自己主張する勇氣、生きて在ることを知って欲しいとの願望を抱かしくくれたのが、若いキャンパー一人一人の、あの暑い日に流された、汗の滴の重たさだった、と。

好善社にとって格別に意義深い出来事として一事を記すならば、松丘保養園の部、通算第七回目の最終日、す

なわち昭和四十七年（一九七二年）八月十三日（日）の聖日礼拝を療養所内の三教派教会（プロテスタントの松丘聖生会、日本聖公会松丘聖ミカエル教会、松丘カトリック教会）と合同で守ったことである（口絵④）。松丘カトリック教会信徒の積極的な働きかけによって、その地のワーク・キャンプはエキューニカルな色彩をしないで濃くしてゆくが、その年のチャプレンの役を引き受けたカトリック司祭、フロラン・ヴィンサン（ケベック外国宣教会）の姿勢にあった。実施前の打ち合わせで藤原が、最終日の礼拝、聖餐式、ミサには、キャンパーは三教会に別れて出席していることを説明したところ「それでは一週間の汗の交わりは無意味となって悲しいことだ。松丘カトリック信徒と共に、聖生会（信徒代表・上田直行）の礼拝に出席させてもらいましょう」と答えたのである。この謙虚な姿勢は、松丘聖ミカエル教会司祭・植松謙爾にも受けいれられ、その聖日は日本のキリスト教会の記念すべき日となって、「らい園教会新聞」第三八号のトップにこう記された。

最終日十三日の聖日礼拝は、松丘聖生会々堂に於いて、キャンパー全員、三教会々員、合計一〇七名で守る。聖日にカトリック、聖公会、プロテスタントの各教会が礼拝を共にするということは、おそらく日本において前例のないことであろう。まさに、日本のキリスト教史の新しい一ページは、らい園教会で開かれたのである。

礼拝は上田直行により聖生会の形式で進められ、説教を担当したヴィンサン神父はつぎのように語った。「キャンプにはいる前に藤原先生と打合わせをしましたが、そのとき先生は、最終日の礼拝にはキャンパーを三つの教会へ分けて出席させると言われた。しかし、私は六日間共に働き語り合ってきたものが最後の礼拝に別々になってしまうというのでは意味がないからなんとか合同で守れるように、とお願いした。そして今日こうしてみんながいっしょに教会に集うことができ大変嬉しい。

今まで教会が違っているだけでお互いが批判したり、憎んだり、争ったことがあったでしょう。キリスト者が未信者に愛を示さなければならぬのに、自からその愛を傷つけることになっていた。その結果、未信者に大きな損きを与えておりました。私たちは信者として過去のことを反省して、本当の意味の信者とならなければなりません。本当にキリストを真実に信ずるならば、過去の一切のわだかまりを捨て愛の人となることができますでしょう。……三教会が理解をもって愛し合うなら、希望をもって対話するなら、必ず見違えるような松丘保養園となることができますでしょう。まず、お互いに自分の心を開くことです。……わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は神から出たものである。(ヨハネ第一、四ノ七)」

出席者一同、大いなる猛省をうながされ、神の讚美は会堂いっぱいを満した。(上田直行記)

## 6 宮古島へゆこう

ワーク・キャンプ五年、一二回を経たところで、若手社員から次の意見書が理事長に提出された。

『奄美・沖縄・インドへ』この言葉が今後のワークの全てを物語っています。南への道を歩むならば、このワークを通して歩みたいと思います。今年の奄美ワークのいかんによって来年か、あるいはそれ以後、沖縄でエキニメニカル・ワーク・キャンプ、特にアジア、アフリカ諸国の学生たち呼びかけ(この場合、新見先生のジュネーブの力をお借りして)ワーク・キャンプを開きたいと思います。そして、好善社の一〇〇周年をインドでワーク・キャンプを開くことにより祝したいものです。アジアの問題をしっかりと受けとめた

いのです。そして、このワークの道を通して、聖書学舎で学んだ人たちを、アジアの療養所に送りたいと思います。かつて、アジアの砂漠をシルク・ロードと呼ばれる長い道によって西洋が東に近づいたごとく、日本のらしい終末を、ワーク・ロードによって伝えたいのです。これは単なる夢ではありません。インドでワーク・キャンプを開くことで、僕のワーク生命の終りとします。

聖書学舎の人々を患者さんとしてではなく、主の同労者として考える気持を、ほんとうに心の底から持つならば、この道を通してあの人たちに生きる証を与えてあげることではないでしょうか。

このビジョンは長尾、高松両兄と共にまとめたものです。このビジョンを生かすためにも、ぜひとも奄美ワークを成功させたいものです。

一九六八年二月十三日 辻井 正

この後にも社員三名（辻井正、長尾文雄、高松且治）の意見が述べられていた。要約してみると、

……教会の中で悶々としている青年をひっぱりだすよう努力したら……。

……ベトナム戦争をもちこんでいるアメリカの基地、沖縄でのエキュメニカル・ワーク・キャンプは、日本の教会にとっても、アジアにとっても重大な価値があるのではないだろうか。

……奄美のもっている秘められた情熱、ヴァイタリティーに触れ、これを吸収したい。

……明治百年を祝うなかで、また「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」が発表され、議論が交わされている中で、日本の近代化の犠牲となった奄美において、その歴史に関わり、人々と話しあい、汗を流すワーク・キャンプが、否定を肯定に変える実践活動の少ない日本のキリスト教界、また、キリスト者にとっても、一つの大切な生き方を示す意味があります。

…：聖書学舎の運営が、ライ園のキリスト者の、また好善社のあり方に、壁を破り、新しい生き方を求める  
勇氣ときっかけを与え、共に自己変革をせまられたと考えられるのではないでしょうか…。

これらの意見は、「七〇年」の世相を陰に陽に反映しており、好善社もその影響下にあった。そして、それは別の面で、理事会には行き詰まりがあった。第一に募金の成績があがらず財政的に窮していたこと、第二に療養所教会は自主独立の姿勢が強まり、戦後の好善社が全力をあげて関わったプロテスタント教会に対する支援活動が段階的に達成の時期に近づいていたことで、今後の在り方が問われていたのである。その結果、三月三十日から一泊で東京の私学会館に社員を集め、全体協議会を開催したのであった。ここでさまざまな議論が展開されたのであるが、ワーク・キャンプの在り方にも批判の声があがり、その夏には継続の可否を決定するために、社員のみによるキャンプが行なわれることになり、公募のキャンプは中止したのである。

さて、その論議と行動をふまえて、ワーク・キャンプは深められながら継続されることとなった。このときを境にして「療養所教会第一主義」から「療養所社会と教会」に視点が移り、一般の療養者に対する関わりを強めたと言えよう。

このことは、また、好善社の広報誌「ライ園のキリスト者」を一九七一年度から「ある群像」と改称させた。前者には、「良い意味での特殊視」があると判断したからである。

さて、好善社社員の視野もひろがり、ワーク・キャンプも曲がり角に来ていたとき、また新しい出発の道が開けた。そのことについて、『ある群像別冊』第二号に藤原は次のように書いている。

かつて私が耳にした沖縄のらい情報の本島にある沖縄愛楽園に關することが圧倒的で、宮古南静園についてはほとんど気にもとめていなかった。だが、昭和四十三年四月に初めて二つの療養所を訪ねてみて、いず

れに心をひかれたと言えば宮古のことであった。その第一印象はさびしさであり、今もそれは変っていない。宮古空港に降り立ったときのこと、平良市に足を踏み入れたときのこと、小雨にけぶる南静園を見おろしたときのこと、そして、その人々と初めて言葉をかわしたときのこと——すべてがそれであった。

宮古島は本島から南西へ三百余軒の海で距てられている。まな板のような平坦なこの島には観光資源はゼロに近いし、産業としてはわずかばかりの砂糖きび栽培が行なわれているだけである。これでは島から人が出ていっても、わざわざ入って来る人はいない。そんな島の北部の東海岸にこの療養所はひっそりと暮らしていた。

そのとき私は思った——ここにも人が住んでいるのだ、忘れられた島の中で、その一隅におしやられてしまっている病める人々の集団を訪ねなければいけない——と。以来、ワーク・キャンプを行なう機会を求め続けてきたが、ずいぶんと年月を要したものである。南静園の人々を本土療養所に招くための道作りをした四十六年ごろから、ようやく好善社の働きが理解されるようになり、今年四月、十二回目の訪問でワーク・キャンプ実施の了解を取りつけた。

藤原の、国立療養所宮古南静園（口絵④）に対するその執着ぶりは「ある群像」に七回も取りあげていることからもうかがえる。

南静園のワーク・キャンプに対して、藤原は「失敗してはならない」と堅く心に決めた。南静園の療養者が「社会の人はこわい」といつているのをきいたことがあって、それほどまでに、この人たちのをけるに、閉じこめていたという自責の念にかられずにはいられなかったからである。実施にあたっては細心の注意を払った。幸いなことに、らい問題に深い関心を寄せている経験者が増えてきていたので、それらのキャンパーから選抜し

て編成し、基礎資料を作成して出かけることができたのである。その上、愛楽園祈りの家教会（日本聖公会）で十数年の牧会経験をもつ鬼本照男（小禄聖マタイ教会司祭）をチャプレンとして招聘できたことであつた。

「この初回は無事に終わったが、ここに特に記しておかなければならないことは、大方の療養者は「島民に理解がある」と主張してきていたのに対し、国立療養所宮古南静園の馬場省二園長は、「ライは消えず」（副題、沖繩宮古本島におけるライの現状）と題して、次のように記していることである。

医療需要の少ない僻地の常として、これは何も沖繩に限つた事ではないが、宮古でも一部では、なお呪咀とか灸が、大衆の疾病対策の一次的な存在となつている。……部落に於て強い発言権を有する老人達は、近代医療に接することの稀なまま昔通りの迷信に近い方法で、家庭内の病人に対して指導発言する。……宮古には、ライ患者に怨まれるような言動をすると、必ずその家族内にライが発生するとの言い伝えが信ぜられている。……家族の一員がライである場合、極力この事を外部に対して隠すのが何処でも普通であるように、部落中が、その部落内のライを隠す傾向がある。……かかる状況であるために、潜伏ライを把握することは、極めて困難である。……昭和四十六年度の、宮古出身のライ新患発生数は三十五名である。……印度を凌駕する濃厚地に居て、あせらずとは言つても、隔靴搔痒の感の中に、徒らに明け暮れている心境である。……理解に乏しい住民に、より高い内容を与えようとする日夜の精神的努力に疲れ果て、総てを投げ出してしまいたい思いに促されることもしばしばである。これを支えてくれるのは、やはり中央の暖い配慮であることをしみじみ思う（「医事新報」 昭和四十八年四月二十八日発行）。

そこで、どうしても直接に島民の口から実状を聴き、時を移さぬうちに報告する必要を感じたので、翌年度はワーク・キャンプというかたちでなく、キャンパー四名と藤原が三回に分かれて島を訪ね、島民にインタビュー

をすることになった。現実には町中で、漁村で農村で五名が出会った話は、耳を被いたくなるような偏見の言葉が大部分をしめ、「あるときは路上で三〇分以上も啓蒙のため話し込んだほどだ」と藤原は言っている。

この調査は最初から発表することを前提として取り組んだものであるが、原稿にしてみると、偏見ばかりが強く浮き上がり、理事会はその出版に躊躇を感じた。そのときのことを彼は、昭和五十一年度、事業報告書の中で理事長の年度末所感として次のように書いている。

「宮古には偏見はない」としばしば耳にした療養者の声はいったいなんなのか。出版によって惹起される事態を予想してみると、決断が鈍った。切角、八年をかけて南静園の人々から親しまれ、交わりを深めてきているのに、これを発表すれば途端に風向きは変って、居心地が悪くなることは火を見るよりも明らかであるからだ。だが、それを恐れているのでは、療養者とそして島の人たちと正しく向きあうことはできないし、ただの慰問者に終わってしまう。まず現実を直視することから始め、それを共に克服することだと決心した。

こうして、「ある群像」第三〇号（昭和五十一年五月発行）には、島民の話がそのままに掲載されたのだが、その直後に実施された第二回目のキャンプは、予想通り三〇号、台風（ある群像）第三〇号）の渦中で行なわれ、重苦しい雰囲気包まれた。その様子の一端を武田道夫は感想文で次のように書いている。

南静園でのワークキャンプは苦しく、悲しいものだった。離島の離島、といわれる宮古島に本土、本島から人が集まって、静かに生活している人々の中へ足を踏み入れて歩きまわる。ある者は土足である者は忍び足。そして歩いているうちに「ある群像三〇号」の反響の大きさに、その声にドキッとする。

あの調査結果を見て、街に出るのが恐しくなった人、あの調査をした好善社を園から追放しろと言う人、目に涙をため、声をふるわして「そんなことはない」と言う人……。

とにかく驚いた一週間のワーク・キャンプだった。ただちょっと気になることがある。それは、パーゲンセールのちらしやラジオ店のちらしが送られてくること、砂糖きび刈りの時は車で呼びに来ることなどで街の人々に対して「ハンセン氏病の啓蒙は進んでいる。」と考へ、そして、そのこと即理解されていると思われるところが、僕は早計ではないかと思う。(確かに啓蒙は進んでいるのですが) 呼びかけてくるのは商人であって他の何人でもなく、労働力が欲しい農業主であって何人でもない。常に自分の利益(金銭的)しか計算していない者が呼びかけてきているようだ。

キャンプ期間中に『宮古祭り』が平良市内を中心に四日間程あったのだが、それらに「参加しませんか。」という街からの呼びかけがあったのかどうか僕は全く耳にしなかった。呼びかけが全くなかったのではなく、南静園囲碁会に対して「来てもらっては困る。」というのはあった。

この祭りには沖繩本島や本土から見物に来る人がいるのだらう。そこでの行事に宮古の人間、平良の人間である園の人に「参加はひかえてくれ。」と頼みにくる同郷人がいる。最終的に園と市役所と会場提供者側との話し合いで参加は出来るようになったのだらうけど、結果じゃなくて、同じ「宮古の人間」が「宮古の人間」に対して道を閉ざす姿は未だ消えてない。宮古祭りは商業祭の色が濃く、歴史もまだ数回という新しいものだ。そこには本土、本島あたりから船に商品を満載して皮算用をしながら商人がやってくる。祭りにつられて人が集まり、人をめあてに商店が殺気立つ。そこには店の評判をおとしたくないという、愛郷心の持主たちが居て、すべてを何かでごまかそうとしている。考えようによっては園の中にも存在するのかもしれない。本当の理解は正しい知識と認識のうえにあるのであれば、それを求めているのであれば、もっともって現実を眼でみつめて対策をたてるべきではないでしょうか。

僕は、この感想文を提出するのは恐いのです。でも、僕が今から何かを宮古島南静園の人たちと共にやっつていくとしたら、正直に書くことしかないと思います。機会があれば訪問します。

宮古での体験が強烈なものであった一人に天羽道子（「社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家」経営による婦人保護施設「すみ寮の指導員」）がいる。天羽は次のような感想文を携え、キャンプ直後の八月三十一日に藤原を訪ねてきた。

この度の体験が、一つの認識となり、教訓ともなって、私の内面を呼び起しています。いまや、らいが、連帯の責めを問われることなくして、ほうむりさられようとしている。（藤原先生の文章の中から）ことに対して、いまだ、らいに対する偏見や怖れを強く持つであらう戦中派の一人として、この連帯の中に、立たせていただきたい、また、いささかでも疎外してきた側の責めを担わせていただきたい思いです。

そして、天羽は、一年間身柄を好善社にあずけて宮古南静園で働きたい、と申し出たのである。以来、馬場園長と数回の交渉を重ね、同園長ならびにベテスダ奉仕女母の家理事会の了解を得て、天羽は昭和五十二年、すなわち好善社創立一〇〇周年記念の年、四月十二日の朝、宮古をめざして羽田を発ったのである。園長あて公文、好第一一四四号（昭和五十二年三月一日付け）には、「療養者に対する日常の介助を直接に行なうことによって、老化する療養者の心状と宮古島のらい事情を理解し、今後の療養所にいかに対応するかを学びたい」と記され、派遣の目的を明らかにしている。